

# 文化財こうち

第1号

平成27年3月31日

高知県教育委員会



ポオー・・・

薄明かりの山里にほら貝が響き、祭りの一日の始まりを告げます。

このほら貝は各奉納組（三つの踊り組があります）の

集合の合図で有り二百二十年も前から、

時を越え変わることなく続いてきた習わしです。

二月十一日祭りの朝は早いです。

真っ暗闇の中、祭りに参加する子どもたちは

緊張やうれしさ満面の顔をして

送迎バスでそれぞれの集会所に集まり、

地元（出身者の方も）の人たちの指導で衣装を付けます

準備が出来上がる頃には冬の日が辺りを明るくします。

トントンチキチトンチキチ・・・はじまりです

目次	[民俗文化財] …秋葉祭り ...1	八代の舞台 ...4	津野山神楽 ...5	いざなぎ流御祈祷 ...6	エンコウ祭 ...7
	[重要文化的景観等] …五藤家資料 ...8	吉村虎太郎邸 ...9	松尾金比羅宮 ...10	十一面観音立像 ...11	
	[史跡・天然記念物] …佐川城跡と松尾城跡 ...12	土佐の鶏 ...13	土佐藩砲台跡 ...14	安岡家住宅 ...15	
	[埋蔵文化財] …芝の前1号墳 ...16	高知城下町 ...17	居徳遺跡群と井尻遺跡 ...18	岡豊城下町 ...19	
		射場屋敷遺跡 ...20	発見された遺跡 ...21	普及啓発について ...22	遺物あれこれ ...23

# 1 秋葉祭り

県保護無形民俗文化財

## (1) 秋葉祭りの由来

秋葉神社のある仁淀川町別枝に、今からおよそ八百年あまり前に、壇ノ浦の戦いに敗れた平家一族が安徳天皇を警護して潜幸されました。この時の見張り番役の常陸国筑波城主佐藤清叡が、遠州（静岡県）秋葉山から勧請して御祭神を岩屋神社に覆い被さる岩窟に祀ったのが祭祇の始まりです。



佐藤清叡の墓碑

その祭神は、火を司る火産霊命で火防や災難避けのご信仰が有ります。その後、ご祭神は、泉光寺・関所番市川家で祀られ、寛政6（1794）年、現在の地に遷されました。その時の約束で、年に一度ゆかりの地に御神幸（里帰り）することとなり、これがつづいている秋葉祭りです。



祭神が最初に祀られた岩窟

## (2) 秋葉祭りは2月9日から11日まで三日間にわたる御神幸

秋葉神社を出発した御神体は、220年前の由来をなぞるように年に一度の旅に出る。

最初に奉祀された岩屋神社でまず一泊。翌日は市川家でもう一夜を過ごされる。ゆかりの地を巡り、三日目はいよいよ秋葉神社へのご遷幸。先払いの先導で一行二百名が岩屋神社を出発する。



寒の中



一日の始まりを待つ先払い

遠景に雪をかぶった山並み。山道を進む時代絵巻の練り行列。大勢の観客が見守るなか、火事装束の若者が大きく身を反らし、青空にパッと黒い鳥毛が舞う。秋葉祭りは一年で最も寒さの厳しい時季。今日一日、天気は持ちこたえてくれるか。風は、気温は、雲のうごきは…。道中の空模様を察じて、紋付姿の男たちが遠くの山並みを見やる…



天候を気遣う年配の人



行列を見守る先払い



山道を歩く神輿

### (3) 年に一度の「秋葉さん」

地元では早くから準備が始まります。前年の師走までには、役をつけなければなりません。

サイハラ用の竹も日の良い時季に取って乾燥させます。新年早々から稽古「ならし」が始まり土曜・日曜日を利用して七日間あります。鉦・手拍子・太鼓・笛のお囃子に合わせて、烏毛ひねり、槍・サイハラ・練り棒を持って踊り子 12 名が練り歩きます。又音頭の唄に合わせて、竹で作った踊り棒を刀で切る太刀踊りの練習などをします。「ならし」の合間を見て先輩の人が大勢集まって、「切り飾り」「はりもの」といわれ、祭りに使う装飾品の準備をします。このように、年に一度の「秋葉さん」に向けて地元の人（出身者）達が何日もかかり準備に励んでいます。



ならし（練習）



先払いのサイハラ



雨を喜ぶ商人



本番に向けて

### (4) 限界集落のまつり

別枝地区の人口はわずか 130 人しかいない、しかも地区全体の高齢化率は 76 パーセント、霧の窪では、100 パーセントに達している、完全な限界集落です。

まつりは子どもたちも大勢参加する、総勢二百人ちかい練り行列です。その人たちはどこからか？…いわゆる地元以外の人達に支えられているのです。子どもたちに参加してもらうことを、雇うといいます。小学校一年生で雇われた子どもは、中学校三年生まではやめることなく続いています。その間、優しくある時は厳しく指導してくれる地元高齢者の人たちとは、おじいちゃんと孫のような絆が生まれ、高校生・社会人となってからも、祭りに参加したくて、帰ってきてくれます。特に地元就職した若者の目指すところは、祭りのヒーローである烏毛役です。ところが今では、仁淀川町でも、小学校・中学校と人数が少なくなり、踊り子を雇うのがいっぱい状態です。どこまで協力を広めなければならぬか。小学生の時から秋葉祭りに出ている若者がいてくれるから続いている祭り。住む人のいない山の中で、練りをやっても祭りとは言えません。先人の作ったこの祭りを、守っていくのが私たち地元の人だけでなく、仁淀川町全体の課題となったのです。（秋葉祭り保存会会長 片岡 和憲）



まあ飲んでや

参考：『写真集 土佐秋葉まつり 練り』（秋葉神社祭礼練り保存会 2005 年）

## 2 時を越えて回り続ける八代の舞台

国指定重要有形民俗文化財

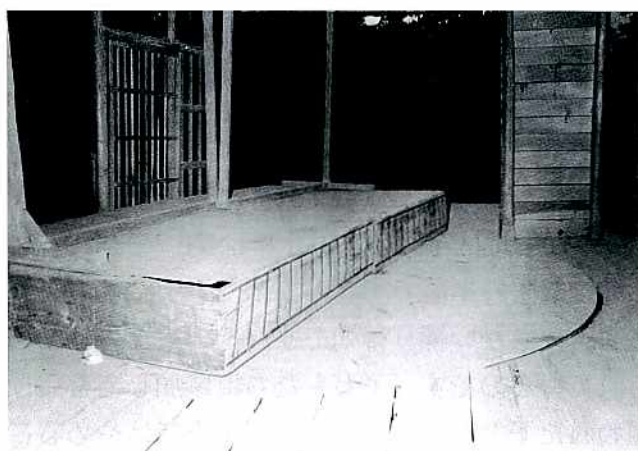
所在地：いの町枝川字川原田

指定日：昭和 51 年 8 月 23 日

八代通り停留所から徒歩で約 20 分のところに枝川八代八幡宮があります。八代八幡宮の廻り舞台の創建は明らかではありませんが、全国でも珍しい昔のままの素朴な形状を備えています。この舞台は歌舞伎用の舞台です。装置はぐるぐると回転する皿廻式になっており、二重台、語り手と三味線弾きが座る太夫座、花道等も備えています。

毎年 11 月 5 日の神祭に地元の青年団により地芝居が行われ、多くの観客が訪れます。これは藩政時代より続けて踏襲されてきたものです。この様な舞台は全国各地の神社でも見られ、県下でも 2～3 箇所ありますが、城下近くでしかも昔の形式のまま完全に残っているのは極めて珍しく、舞台を通して平和であった昔の人々の生活を思い浮かべることができます。

昭和 51 年 8 月、国の重要有形民俗文化財に指定されましたが、建築以来根本的な修理



二重台のある回り舞台

を行ったことがありませんでした。そのため礎石も狂い建物の傷みもひどく、それに加え白蟻の害を受けるなど放置することができない状態になりました。昭和 56 年度に国、県、町の補助金を得て、瓦、柱、梁等を残す「半解体修復工事」を行い、以前よりはるかに良い条件のもとで使用されています。また、平成 22 年度から 23 年度にかけて災害等に備え、柱および建物の足回りの補修・補強工事を行いました。(いの町教育委員会 秋田 梓)



農村歌舞伎の様子



毎年たくさんの方が歌舞伎を見に訪れます

### 3 津野山神楽

国指定重要無形民俗文化財  
開催：毎年 10 月下旬～ 11 月下旬

津野山神楽は、延喜 13 (913) 年、藤原<sup>つねたか</sup>経高が津野山郷に入国した際、伊豆の国より三嶋神社を勧請して守護神として祀られたときから、代々の神職によって歌い継ぎ、舞い継がれたものと伝えられています。

昭和 20 年の敗戦による混乱と、神楽習得者の減少により一時すたれかかっていたが、昭和 23 年神楽復興の気運がおこり、津野山神楽保存会が設立されました。

それまでの神楽は、代々特定の神職により世襲的に歌い、舞い継がれてきたものでしたが、当時、この技を習得している唯一人の神職、掛橋富松翁を師として旧習を破り町内 (当時村) 各地区から推された青年十数名に口伝により伝承講習されました。その後は、歴代の首長が保存会長となり、後継者が養成されています。

神楽は 18 節からなり、正式に舞い納めるには約 8 時間を要します。急テンポの楽に合わせた舞でありながら、優美荘重で雅の言葉そのままです。

昭和 55 年 1 月 28 日、土佐の神楽の一つとして、国の重要無形民俗文化財に指定されました。平成 26 年は 10 月 30 日 (木)・11 月 3 日 (月)・23 日 (日) に神楽が行われました。

(梶原町教育委員会 川田 忠久)



たいぼん  
大蚤



たい  
鯛つり

アクセス：JR 土讃線須崎駅下車⇒高知高陵交通バス梶原行きに乗車⇒終点梶原下車  
：JR 予讃線宇和島駅下車⇒宇和島自動車旧日吉村方面行きに乗車⇒  
旧日吉村夢産地前に下車⇒高知高陵交通バス梶原行きに乗車⇒終点梶原下車  
：車では高知自動車道「須崎東 IC」から約 50 分

問い合わせ先：梶原町役場 HP (<http://www.town.yusuhara.kochi.jp/>)

## 4 いざなぎ流御祈祷

国指定重要無形民俗文化財

「いざなぎ流御祈祷」は、香美市物部町（旧香美郡物部村）を中心に守り伝えられてきた、極めて古い要素を含む民間信仰です。

祭り（地域では「祈祷」と呼びます）の中で行われる舞は現在「いざなぎ流神楽保存会」により保存伝承されています。いざなぎ流は、太夫と呼ばれる、この地域に住む宗教者たちにより受け継がれています。主として口伝えで知識や方法を身につけ、家の神や地域の氏神の祭りなどを執り行います。太夫は、普段は農業や林業などに従事する人がほとんどで、依頼があったときに祭りや祈祷（病人祈祷、家祈祷など様々です）を行います。基本的には世襲制ではなく、太夫の下に弟子入りをした人がたくさんの知識を受け継ぎ、「許し」を得て太夫になります。



しゃくじょう  
錫杖・扇の舞

襲制ではなく、太夫の下に弟子入りをした人がたくさんの知識を受け継ぎ、「許し」を得て太夫になります。

太夫は呪術的な力（法、法力）を身につけており、太夫同士が法比べをしたという伝説も物部町には多く残されています。中には大豊町の太夫と法比べをしたという話も伝えられています。

祭りでは「祭文」と呼ばれる、神々の由来を語る物語を唱えます。祭文は神を喜ばせるためのものなので、祭文がひと段落したところで儀礼がうまくいっているか、神が喜んでいるかを確認するために数珠を手に取り「占い」をします。いい返事が得られたらそのまま続け、駄目ならば原因を究明し解決するための手立てをします。この点に一般の祭りといざなぎ流の祭りの違いがあるとも言われています。

また、神霊が宿る「御幣」があります。和紙から切り出される様々な御幣の総数は二百とも三百ともいわれますが、これは地域や伝承者により形などが少しずつ違うためです。

いざなぎ流神楽は高知県内のイベントで上演する時があります。また、「いざなぎ流と物部川流域の文化を考える会」が公演や研究会を行っています。機会があれば是非いざなぎ流の世界を垣間見てください。

（香美市教育委員会

小林 麻由）



たすき  
襷の舞

## 5 「南国市後川流域のエンコウ祭」の調査

「南国市後川流域のエンコウ祭」は、エンコウと呼ばれるカッパによく似た妖怪を祭って水難防止を祈願する伝統行事で、平成23年3月に国の「記録作成の措置を講ずべき無形の民俗文化財」に選定されました。エンコウ祭は、各地区の橋のもとにショウブの葉で小屋を作り、エンコウの好物であるキュウリやお酒などをお供えます。また、祭りの運営には小中学生が参加し、「大将」と呼ばれる年長者を中心に行うことが大きな特徴です。しかし、近年、エンコウ祭を担う子どもの数が減少してきていることから、行事が成立しないことも懸念されていて、早急に現状記録と多角的な調査が必要とされるようになりました。そのため、南国市教育委員会により南国市後川流域のエンコウ祭調査委員会を設置し、検討・協議の内容を基にした民俗学的調査を実施しました。



前浜浜窪の土俵作り



前浜中組のショウブ小屋作り

調査は、平成26年6月7日に調査委員をはじめとして、高知県立大学文化学部の学生10名によって実施しました。久枝東組・中組・西組、前浜浜窪・寺家・中組・西組・里組



久枝中組の打ち上げ花火

の8集落におけるエンコウ祭の聞き取り・アンケート調査、デジタルカメラ・ビデオによる撮影・映像記録などを行いました。寄付集め、花火の買い出し、ショウブの刈り取り、ショウブ小屋作り、提灯設置、夕食、お供えと参拝、花火、相撲、エンコウの川流れ、後片付けなどを記録しました。調査に当たっては地元住民をはじめ、多くの皆さんにご協力いただき、初めて全地区のエンコウ祭の詳細な流れを記録することができました。



久枝西組のショウブ小屋

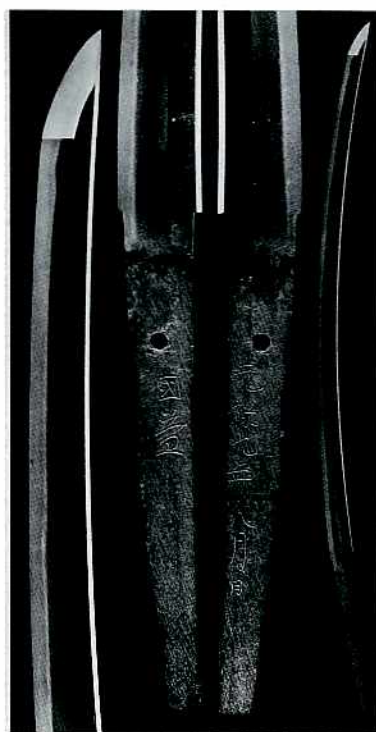
調査を通じて、子どもたちのエンコウに対するイメージがカッパそのものであることや、信仰心が薄れている点については、時代性を感じました。学生たちは、シュービンという打ち上げ花火に圧倒されつつ、「大人がこれまでの伝統を守って、子どもたちに伝えている様子やこの日のために県外から帰って来る若者たちの姿を見て、この地域で本当に大切にされている祭りだと実感しました。これからも続けて欲しいです」と感想を述べていました。

(高知県立大学 橋尾 直和)

## 6 安芸市の文化財

### —土佐藩家老五藤家資料について—

安芸市には国の重要文化財に指定されている<sup>みょうさんじ しょうかんのんりゆうぞう</sup>妙山寺の聖観音立像をはじめ、天然記念物に指定されている伊尾木洞のシダ群落や県保護無形民俗文化財の赤野獅子舞など、多くの文化財が残されています。今回はその中より、当館が所蔵する五藤家資料を紹介します。



刀銘 国益

五藤家は、江戸時代土佐藩の家老を務めていた家で、初代藩主の山内一豊とともに土佐に入国し、安芸を任されました。五藤家には、1000点をこえる武具や絵画、漆工品、陶磁器などの美術工芸品があり、さらに約2万3千点の古文書が残されています。これらは、五藤家の高知屋敷の土蔵の中に収められ、さらに長持やたんす等に入れて保管されたことにより、資料が比較的良好な状態で保たれています。また、五藤家の歴代当主が、明治以後も定期的に防虫剤の入れ替えや点検を重ねるなど、資料を大切に保存してきたことが、現在まで散失せず残されている理由でしょう。

昭和60(1985)年、五藤家は市民共有の文化財として後世に伝えるため、これらの資料を安芸市に寄贈寄託され、現在当館で保存公開されています。このなかで「刀銘<sup>くにます</sup> 国益」と五藤家文書が県保護有形文化財に、「蒔絵船形弁当<sup>まきえふながたべんとう</sup>」「三十六歌仙図屏風<sup>さんじゅうろっかせんずびょうぶ</sup>」など27点が安芸市保護有形文化財に指定されています。館では、季節にあわせて資料の展示を行っていますので、ぜひご覧ください。(安芸市立歴史民俗資料館

門田 由紀)



蒔絵船形弁当



## 7 吉村虎太郎邸の復元事業について

### —重要文化的景観—

吉村虎太郎は、天保8（1837）年、芳生野村（現在の津野町芳生野）に生まれ、嘉永元（1848）年に12歳で父の後を継ぎ、北川村の庄屋となりました。

その後、須崎浦、下分村、栲原村の庄屋を務めましたが、文久2（1862）年に日本を住みよい世の中に変えなければという大志を抱いて脱藩し、主に長州（山口県）、京都を行き来し、勤王の志士たちと交わり、その生涯を尊王討幕に捧げました。



茅葺屋根

町では明治維新の先駆けとなった吉村虎太郎の功績を後世に残そうと、生家復元を計画、平成24年度に基本設計を行い、本年度に建築を行っております。

生家復元にあたっては、解体時に書き留めたスケッチなどを基にし、できる限り当時の間取りとなるよう設計しました。

また、虎太郎の姉が嫁いだとされる津野町内の家屋から古材を譲り受け、梁や建具を一部使用するとともに、虎太郎の終焉の地であり、津野町と姉妹町村である奈良県東吉野村から寄贈された長さ約4メートルの吉野杉の天然絞り丸太が床柱として使用されます。

津野町は平成21年に四万十川流域の自然・歴史・文化・生業で構成された景観が、国の重要文化的景観として近隣5市町連携で選定を受けており、今回復元を行う吉村虎太郎邸跡の門・塀及び芳生野地区の里山景観は文化的景観の重要構成要素となっていることから、復元後は「四万十川流域の重要文化的景観」の拠点として、町内外に広く情報発信をする施設として活用を考えておりますので、完成の際は是非足を運んでください。

（津野町教育委員会 大崎 昭彦）



古材の梁



東吉野村から寄贈された床柱

## 8 在地廻船商人たちのメルクマール

### —「松尾金比羅宮灯明台」—

県西部・土佐清水市域には、寺社境内などに鎌倉から江戸時代にかけて製作された花崗岩や砂岩製の常夜灯や手水鉢、五輪塔群などの石造物が多く現存しています。

特に、足摺半島には、江戸時代中期から末期に製作された常夜灯や手水鉢があり、この時期に活躍した廻船商人たちが共同出資し、建立されたものがほとんどです。彼らは、鯉節などの海産物を製造・販売して蓄財しました。足摺岬の西側に位置する松尾集落は、江戸時代中期以降、鼻前七浦の一つに数えられ鯉漁が盛んでした。その頃、この地を据浦として進出し、隣接する白碇沖漁場に進出したのは、紀伊国印南浦の角屋与三郎でした。彼の墓碑は松尾集落に置かれ、「旦那さんの墓」として親しまれ、今でも豊漁の神として地元の人々の尊崇を集めています。

その松尾集落北側の山腹に高さ約 2.7 m、最下段約 1.8m 四方の台座に四段からなる砂岩製の灯明台が設置されています。「安政七年三月」（1854 年）建立の銘があり、今から 160 年前に地元の廻船商人たちにより共同建立されたものです。

台座三段目に世話役及び講中の屋号と名前、石工 3 名の名前とその出身地が刻まれています。最上段四段目には、松の木とそれに跨る 2 匹の猿、西面に竹、東面に梅が浮き彫りされています。松竹梅は縁起を担ぎ、松の枝に跨る猿は「待たざる」を意味し、鯉漁に向かった漁夫たちの無事帰港を祈願する肉親の心情を表現しています。台最上部の石皿には油溜りの空洞があり、ここに木片を詰め込み、火種としました。この灯明台は、江戸時代中期以降に活躍した在地廻船商人の繁栄を証明する貴重な文化財として、昭和 47 年 4 月 30 日に土佐清水市指定文化財に登録されました。

足摺半島には、同時期に在地廻船商人たちにより建立されたこのような石造物が数多く現存しています。これらは決して言葉を発することはありませんが、彼らの生きた証や誇りを後世に示すためのメルクマール（指標）であり、一字一字に刻み込まれた思いが今を生きる私たちにメッセージとして強く伝わってくるようにさえ思われます。

（土佐清水市文化財調査会委員 田村 公利）



金毘羅宮灯明台全景（東面から）



金毘羅宮灯明台座正面部分（三段目と四段目）

## 9 木造十一面観音立像

— 国指定重要文化財 竹林寺蔵 —

頭上に十一の顔を持ち、さまざまな表情で人々の願いに応えるという姿を表した観音像です。48.7cmの小振りな像ですが、一本のカヤの木から全身を彫り出し、細かい頭上面や胸・腕飾り、天衣なども刻み込んだ、いわゆる一木造の像です。寺の宝物館で拝観することができます。

かつてインドや中国では、仏像の材として白檀のような美しく緻密で芳香を放つ木が重宝されました。希少で部位の限定される材からは小さな像しか造れません。しかし、かえって運搬はしやすく、個人の礼拝にも適していることから、まず大陸から我が国にもたらされ、日本でもそれを手本にした像が平安時代初期を中心に多く造られました(カヤ等で代用した「檀像」風彫刻)。主に一木で全体を彫り出し、華やかな彩色を施さないのが特徴です。それらの小像は主に近畿地方の寺に多くのこります。

このような像が、地方のしかも僻遠の土佐にあることは興味深いことです。土佐の平安時代の仏像中でもこの像は特に古く、十世紀以前の様式であることも目を引きまします。広い肩で胸を張ったたくましい体格で、表情も切れ長の眼に口を強めに結び、頭上面を粗く表した野性味のある姿は、観音の優しいイメージとは異なります。

四国は空海の生誕・修行の地として、それを慕う宗教者たちが数多く訪れています。彼らの活動を念頭に、文殊信仰の聖地・五台山とはまた異なる側面からも、地域の歴史に様々な想像を巡らしてみたくなる尊像です。(高知市教育委員会 梶原 瑞司)



高知市 竹林寺の位置



木造十一面観音立像



## 10 佐川町の文化財

### ～松尾城跡～



佐川町上郷地区、高知市方面から霧生関きりゆうせきトンネルを越え国道33号を西へ進むと、文化施設や商業施設が建ち並ぶ場所の北側に松尾山があります。

誰がいつ築城したのか明確に記す資料はありませんが、歴史上に登場する最初の記録では、南北朝時代の佐河四郎左衛門が、その後、佐川越中守、中村越前守、そして戦国時代長宗我部氏が高吾北地方を攻略すると、その重臣である久武内蔵助が居城したとされています。

標高196メートル。詰、物見台、郭、竪堀、堀切、畝状竪堀群など大規模な遺構が数多く遺存します。また、土師質土器、陶磁器片、鉄製鱈口片などの遺物が採取されています。



松尾城物見岩

### ～佐川城跡～



佐川城石垣

佐川町の中心部、国の重要文化財「竹村家住宅」、白壁の酒蔵通り、県下最古の木造洋館「佐川文庫庫舎」など歴史的景観が残る上町地区こじょうざんの南側に古城山があります。

長宗我部元親が土佐を統一した天正のはじめ、その重臣である久武内蔵助は松尾城の対岸に位置する、現在の牧野公園の上方、古城山に城を移したといわれています。

その後、長宗我部氏の四国制覇、秀吉の九州征伐への従軍、朝鮮出兵と激動の時代が過ぎ、関ヶ原の戦を経て長宗我部氏が土佐での勢力を失うと、土佐の新国主山内

一豊の筆頭家老深尾重良がこの城に入城しました。

その後、徳川幕府の一国一城令により佐川城は取り壊され、元和二（1616）年に廃城となりました。佐川城跡は標高200.4メートルにあり、詰、郭、土塁、堀切、竪堀、石垣などの遺構が現存します。そして西の出城は典型的な中世の山城の形態が残り、深尾時代以前のものであると考えられます。佐川城跡に唯一残る石垣は、5段～8段の野面積みで、高さ2.5メートル、長さ16.2メートルに亘り残っています。また、隅角部分は、大きいもので100センチ×70センチの整形した石材を用い、算木積みの手法が用いられています。

遺物については、播り鉢片をはじめ、深尾氏統治の時代の瓦片が多数出ており、昭和16（1941）年には詰ノ段南斜面より鬼瓦の一部が採取されました。（佐川町教育委員会 横島 小百合）



良好な状態で残る佐川城石垣

# 11 土佐の鶏

～残すべき財産～



みなさんは高知が多くの貴重な鶏の原産地であることをご存じですか。現在、我が国の天然記念物として指定を受けている鶏17種のうち、高知県で生み出されたものが6種も含まれており、中でも「土佐のオナガドリ」は特別天然記念物指定を受けています。

土佐の先人達は長い年月をかけて優美さ・愛らしさ・勇敢さ等、様々な特徴を持つ種を作り上げ、愛好家の方々のご努力により今日まで受け継がれてきました。

今でこそ、鳴き声を聞くことやその姿を街の中で見るとは珍しくなりましたが、数十年前まで鶏はごく普通に民家の庭先で飼われ、朝は夜明けを知らせ、卵を産み長い間人々の暮らしに溶け込んでいました。小学校の校庭などでも飼育されている姿がよくみかけられていたものです。



東天紅鶏・トウテンコウ（長鳴きが特徴）









蓑曳矮鶏・ミノヒキチャボ

しかしながら、住宅事情の変化やペットの多様化、飼育者の後継者不足など様々な事情で飼育羽数が減少し、貴重な鶏達の将来が心配されています。

まずは、この高知に残すべき財産である鶏が存在することをみなさんに知っていただき、その保存活動にご理解とご協力をよろしくお願いいたします。

（高知県文化財課 安藤 浩子）

## 高知原産の鶏（天然記念物）

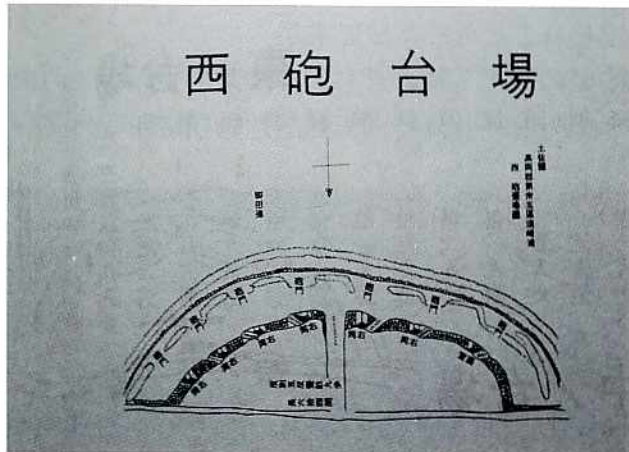
-  土佐のオナガドリ（特天）
-  東天紅鶏（トウテンコウ）
-  鶉矮鶏（ウズラチャボ）
-  蓑曳矮鶏（ミノヒキチャボ）
-  地鶏（ジトリ）
-  軍鶏（シャモ）



鶉矮鶏・ウズラチャボ

## 12 須崎の砲台

### とさはんほうだいあと —土佐藩砲台跡—



土佐藩砲台跡西砲台図

嘉永から安政年間にかけて、土佐藩では黒船来航に備えて沿岸各地に砲台の築造が命じられました。須崎では文久3（1863）年、須崎港口に東・中・西の3か所の砲台が築かれることとなり、同年7月16日から順次着工、そして8月27日一気に完成をしました。この工事では高岡郡中に寄付と出役が命じられ、特に須崎の郷浦からは1戸3人役の働き手を出させるなど、とても過酷な労働だったと思われます。

3か所の内、東・中の砲台はそれぞれ3門・4門の砲を備える比較的小規模の砲台で、現在は市街化がすすみ、かすかに痕跡を残すのみとなりましたが、1番大きな西砲台が国史跡として保存されています。

西砲台は、須崎市<sup>なかまち</sup>中町2丁目109番地に位置し、半円形で8つの土盛りの間に7門の砲を構え、内側の石垣に7カ所の火薬室を設けていました。現在その火薬室は全面石垣となっていますが、よく見るとその痕跡がわかります。

縄張り（設計）については、須崎出身の勤王の志士公文藤蔵、土佐藩砲術師の田所左右次、その弟子で幡多出身の樋口真吉の名があがっていますが、はっきりしたことはわかっていません。

また須崎の砲台は坂本龍馬との関係も深く、慶応3（1867）年7月、長崎で起きた英船イカルス号事件の談判のため、急ぎよ大阪から砲台の目の前の須崎湾へと入り、交渉を見守りました。当時の須崎は戦争が始まったかのような騒ぎで、その時この3か所の砲台は重要拠点として位置付けられたことでしょう。また、龍馬は同年10月初め再帰国した際にも須崎にいました。そして須崎港から京都へと向かい運命の11月15日を迎えます。龍馬が最後に踏んでいた土佐の地は須崎だったと言えます。須崎の砲台は、そういった歴史もじっと見つめてきました。（須崎市文化財保護審議会委員



梅原 靖博)

土佐藩砲台跡の内側石垣

# 13 重要文化財安岡家住宅の解体修理

## — 建築学・歴史学・考古学そして民具学 —

香南市香我美町山北の安岡家住宅では、建物復原のための解体修理調査が着々と進んでいます。県内の重要文化財に指定されている建造物 18 ケ所の中でも数少ない江戸時代「郷土屋敷」の面影を伝える建物です。平成 30 年度の完成を目指し、中心となる主屋の解体作業が完了しました。主屋のあった場所に礎石が整然と並ぶ姿に、「まるで古代遺跡のようだ！」と感嘆の声が上がります。

解体修理で明らかになったのは、建物の変遷と増改築の歴史。釘一本一本にいたるまでの綿密な調査で、まるで推理小説の謎解きのように建物の歴史が解き明かされていきます。建材に残された墨書から、主屋の創建時期が「文化五（1808）年」まで遡ることがわかりました。

安岡家には、幕末のできごとを伝える日記（「文助日記」）が一族の安岡文助によって遺されており、建物本体の調査と同時に古文書や歴史資料の分析も行われています。建物復原のためには、土佐藩の下士である「郷土」の研究など歴史学の成果も欠かせません。

建物解体後は考古学の出番です。発掘調査により、整地層やカマドの痕跡確認など復原に必要な情報を集めます。床下の調査で、漆塗りのお椀を埋めた地鎮遺構、直径 36cm 程の円筒形の穴が 20 基以上並ぶ謎の床下遺構群など、予想外の事実も明らかになりました。

蔵の中の民具も安岡家の歴史を理解する助けとなります。注目される民具は「蚕の種紙」と「版木」。種紙とはカイコガに卵を産ませた台紙で、明治 40 年に法律で 28 マスという規格に統一されます。安岡家の種紙は国内でもあまり例がない 25 マス。当家で明治時代に養蚕が盛んに行われたことを示す貴重な資料です。

いくつかの学問領域にまたがり、総合的に研究を進めることを「学際的研究」といいます。安岡家住宅の調査はまさに学際的研究です。これから郷土屋敷が江戸時代の姿に復原されるまでの 4 年間、安岡家住宅の現場から目が離せません。



安岡家住宅主屋の発掘調査



蚕の種紙と版木（25 マス）

（香南市文化財センター 松村 信博）

## 14 芝の前1号墳について

南国市岡豊町定林寺字芝の前にある定林寺芝の前1号墳は古墳時代終末期（約1400年前）の古墳です。昨年に引き続き発掘調査したところ、多くの副葬品（土器・鉄鏃・馬具など）が出土しました。

定林寺芝の前1号墳は、直径14mの円墳と考えられ、墳丘の中心に横穴式石室を持ちます。横穴式石室は大型で、長5.4m×幅1.9m×高さ2.4mの玄室に短い羨道がつきます。今年度は玄室をすべて発掘し、羨道部も部分的に調査をおこないました。奥壁部分には盗掘の跡が見つかりましたが、それ以外では礫を敷いた床が見つかりました。また玄室と羨道の境界には幅広い敷居石が置かれていることが分かりました。



刀の鏢

もともとの位置にあったものではありませんが、多くの副葬品が出土しています。須恵器・玉・鉄の矢じり・ナイフ・リング状のイヤリングなどとともに、馬につける飾りである辻金具が4点出土し、昨年度とあわせ計5点出土しています。辻金具には金メッキがほどこされていました。このほかに刀の鏢も1点出土しています。残念ながら刀身は失われていましたが、刀や弓を持ち、金色の飾りを付けた馬に乗る被葬者の姿が想像されます。ただ、被葬者は一人ではなく、イヤリングが9個も出土していますので4～5人の被葬者がいたと思われます。



耳輪出土状況

今回、完形の土器がたくさん出土したことも成果の一つです。考古学では土器の形から時期をきめることができるからです。土器を見ていますと、すべて7世紀前葉の形をしています。調査前には6世紀にさかのぼるかもと思っていましたが、この古墳は7世紀に下るようです。調査は本年度で終わりですが、出土した資料を分析し、展示できるように研究と報告を今後行っていきます。（高知大学 清家 章）



石室の調査状況



土器出土状況



## 15 土の中の高知城下町

### ～高知城下町の近年の発掘調査～

江戸時代の高知は高知城跡に象徴され、現在では追手門や天守閣、本丸御殿は重要文化財に指定されています。また、高知城築城と併行して城下町の建設も行われ、高知城下町の郭中は北を江の口川、南を鏡川とし、東側は現在の堀詰、西側は金子橋付近に新たに堀を設けて、これらの範囲に上級・中級武士が居住したとされています。近年、この高知城下町関連の遺跡の発掘調査事例が増加し、貴重な成果があがっています。

2001年には裁判所庁舎建替えに伴い高知城南西部に位置する高知城伝下屋敷跡<sup>でんしもやしきあと</sup>の調査が行われ、山内家の家紋である三ツ葉柏文<sup>みつばかしわもん</sup>の軒丸瓦や「松平土佐守」と書かれた木簡<sup>もつかん</sup>が出土しており、藩あるいは藩主関連の施設の存在を示唆する遺物が見られるほか、漆器をはじめ上手の土器が多数出土しています。2007・2009年には総合あんしんセンター建設や高知法務総合庁舎建設に伴い、高知城西側に位置する西弘小路遺跡<sup>にしひろこうじ</sup>の調査が行われました。出土した遺物には茶道具やもてなしの器が多量にみられます。高級食器である漆器の出土量は県内では最多であり、県内唯一の螺鈿<sup>らでん</sup>や蒔絵<sup>まきえ</sup>も出土しており、高い禄を賜った家臣など上級武士の屋敷地であったことがわかります。2011・2012年には新資料館建設に伴い高知城東側に位置する弘人屋敷跡<sup>ひろめ</sup>の調査、2013年度は新図書館建設に伴い追手筋遺跡<sup>おおてすじ</sup>の調査が行われました。追手筋遺跡は江戸時代の絵図によると家老である山内家や百々家、藩医である村田家が居住していたとされる場所であり、調査では居住者の名前が書かれた木簡が出土し、絵図に書かれていた人物が実際に居住していたことがわかりました。また、絵図に書かれていた屋敷境の溝跡が確認されたほか、江戸時代の上水施設や全国的にも類例が少ない武家屋敷に伴う池跡が確認されるなど非常に貴重な成果が上がっています。高知城北側では2003年に土佐藩の藩窯であった尾戸窯跡の調査が行われています。尾戸窯跡の白土器は土佐の名産品であり、贈答用として用いられ、高知城下町のほか江戸などで県外でも出土しています。

この様に、高知城下町では農村では見られない遺物が多く出土しており、発掘調査によって、これまでの江戸時代のイメージが大きく変わりつつあります。また、意外に知られていない成果として高知城下町で弥生時代の遺物が出土していることがあげられます。さらに、古墳時代以降の生活の痕跡も確認されており、江戸時代以前から土地が利用されていたことが明らかになってきています。高知城下町にはまだまだ知られていない歴史が眠っており、今後の発掘調査から目が離せません。(県埋蔵文化財センター 徳平 涼子)



追手筋遺跡調査風景

## 16 土佐市内における平成26年の発掘調査の成果について



1 居徳遺跡群で検出された埋没丘陵



2 縄文・弥生土器と石製品



3 検出されたピット群



4 出土した中国製青磁・白磁

土佐市内では平成26年に高岡町所在の居徳遺跡群と、宇佐町所在の井尻村中遺跡で発掘調査を実施しました。

居徳遺跡群は四国横断自動車道建設に伴い発見された縄文時代後期～中世の遺跡で、過去の調査では、国内に類例のない木胎漆器や最古の鋤、東北地方の亀ヶ岡文化に伴う大洞式土器、県下では初例となる土偶や矢で射貫かれた人骨など、従来の縄文時代観を揺るがす発見が相次ぎ、全国から注目を集めました。

今回の調査では、住居などの遺構は検出されませんでした。埋没丘陵と谷が見つかり（写真1）、縄文時代晩期を中心とする多数の土器や石製品が出土しました（写真2）。こうした発見から得られた地形や遺物の分布に関する情報は、当遺跡内で未だに見つからない、集落本体の位置を推定するための手掛かりとなることが期待されます。また、縄文時代終末期と弥生時代初頭の土器が一緒に出土していることは、弥生文化がどのように受容されたのかを考える上で大変重要です。

一方、井尻村中遺跡は『埋文こうち 第27号』でもご紹介した通り、前の関白、一条教房が寄港したことで知られる「井尻港」と深い関係をもつと考えられる遺跡です。今回実施された初の本発掘調査の結果、奈良時代以降のピットが見つかり、コンテナで30箱近い遺物が出土しました（写真3）。遺物の多くは教房が寄港した室町時代（14～15世紀）に属し、中国製の青磁・白磁・青花、備前焼、瀬戸美濃焼、畿内産の瓦質土器など、他地域からもたらされた土器の多さは、大平氏の本拠地である蓮池の外港としての役割を担った井尻の繁栄ぶりを示すものとして注目されます（写真4）。

また、奈良～平安時代に属する多数の土器に加え、縄文時代晩期から飛鳥時代までの各時代の土器や、土錘（漁網の錘）・製塩土器など生業に係る遺物も出土しており、井尻における人々の活動が、文献史料に登場するより二千年近く遡ることが明らかとなりました。

（土佐市教育委員会 池田 研）

## 17 南国市 岡豊新町・国分古市の調査

### —岡豊城下町の成り立ち—

長宗我部氏の居城である岡豊城は、標高97mの岡豊山にあり主郭部からは広く香長平野を一望できます。周辺には、家臣の土居が岡豊城を取り巻くように点在し、東には長宗我部元親が再興した国分寺も立地します。国分寺から岡豊城へいたる道沿いには、「長宗我部地検帳」の記載から岡豊新町、国分古市という市町があったとされています。地検帳には、岡豊側に「新町」というホノギ名を記した屋敷が連続して記載され、東の国分側には「古市」と記した屋敷がまとまってあり、初期城下町を形成していました。それを現地にあてはめると、岡豊城の麓の南北の街路沿いと笠ノ川を挟んで東西の街路沿いの2つの町に分かれ、現在も道に面して短冊形の区画の水田がいくつも並んでいます。

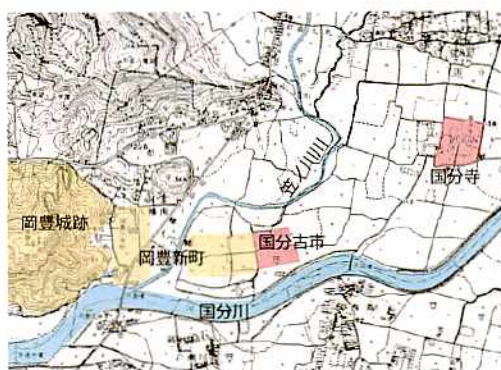
これまで具体的に城下町の存在を示す調査はされていなかったため、平成25年度に南国市教育委員会では、国分と岡豊の境界にあたる位置の水田で発掘調査を行いました。

調査により、街路に面した地点では道に平行する溝跡や多くの柱穴等が確認できました。これらの埋土には、焼土や鉄を溶かした後に出る鉄滓等が含まれており、鉄製品の修理等、鍛冶に関連する場所であった可能性があります。

今回初めて岡豊城下町に想定されている場所の発掘調査を実施したことで、岡豊城を支えた人々の生活の痕跡を確認することができたのは大きな成果と言えます。また、地点により出土状況が大きく異なり、街路に面する地点では建物の痕跡が見つかったものの、奥側では明確な遺構は見つかりませんでした。これは、屋敷ごとに畑や庭などを持ち、生活に即した土地利用がされていた可能性も考えられます。

今後、さらに城下町の調査を進めていくことで、戦国時代に花開いた岡豊文化を育んだ人々の生活ぶりを垣間見ることができるようでしょう。

(南国市教育委員会 油利 崇)



岡豊城と城下町 位置図



城下町から岡豊城を臨む



遺構検出状況



柱穴内の焼土出土状況

# 18 香南市 射場屋敷遺跡

## — 津波避難タワー整備に伴う記録保存調査 —

射場屋敷遺跡は香南市吉川町吉原よしかわ よしはらに所在しています。遺跡は標高7m前後を測る河成堆積扇状地かせいたいせき のいち（野市台地）に位置しており、扇端部から沖積低地ちゅうせきへと移行する地形に立地しています。国の防災対策事業による津波避難タワー整備に伴う試掘確認調査により、平成25年度に新たに発見された遺跡です。

当該地には、鎌倉時代初期に立荘したとされる「吉原庄」よしわらのしょうの歴史が伝えられています。『長宗我部地検帳』ちやうそかべちけんちやうに記される寺堂・屋敷地名等が現在も遺されており、調査対象地の小字（「射場屋敷」）から中世に由来する遺構・遺物の埋存が予測されました。

平成26年度に実施した本発掘調査の結果、約2,800点の弥生時代後期後葉（約1,800年前）の土器片と、竪穴住居遺構などの集落跡を検出しました。物部川下流域東岸の段丘縁辺部に分布する弥生時代終末～古墳時代初頭にかけての遺跡群との関連性が考えられ、成立の背景には拠点集落田村遺跡なんこく（南国市）の廃絶が要因の一つとして指摘されています。



緑釉陶器片

中世（鎌倉・室町時代）の遺物は、多くの土師質土器片をはじめ、煮炊きに用いた瓦質土器片や中国産（龍泉窯系）の青磁片等が出土しました。遺構は柱穴の可能性が考えられる土坑群を検出しましたが、掘立柱建物跡等の復元は今後の課題となりそうです。また、古代（奈良・平安時代）の遺物としては、須恵器片や製塩土器片などのほかに、職場体験学習の研修生が、非常用品的な側面を持つ希少な緑釉陶器片りやくさい（洛西産 / 京都）を掘当てるなど、この地域の歴史に関する新しい発見もありました。

発掘に際して、地元の小学校児童による遺跡見学や、地区の方々を対象とした現地説明会に多数ご参加して頂けるなど、埋蔵文化財の保護に対する周辺住民の関心の高さと、ご理解・ご協力に深謝いたします。  
（香南市文化財センター 宮地 啓介）



吉川小学校 遺跡見学



現地説明会

## 19 新発見の遺跡

### — 香南市野市町と安芸市伊尾木で発見された遺跡 —

高知県教育委員会文化財課が新たに発見した3つの遺跡を紹介します。

最初の2つは香南市野市町下井で発見した「高田」と「宇賀」の遺跡です。遺跡は物部川に沿って長く延びる河岸段丘（野市台地）上に位置しています。高田は台地の西の崖際、宇賀は中央付近にあり、両者の間にはおよそ700mの距離があります。どちらも道路（南国安芸道路）建設に先立つ小規模な発掘調査（試掘確認調査）によって発見されました。

野市台地は古い扇状地なので深く掘ると丸い礫の層が出てきます。その礫層の上には古い地面（黄褐色土層）があり、その上に過去の生活で堆積した黒っぽい土の層（文化層や遺物包含層という）があり、一番上には田んぼの土が積み重なっています。高田の遺跡では堆積が厚い部分に2つの文化層があり、2つの時代の歴史が埋もれていると分かりました。出土した遺物は平安時代や室町時代のもものが多く、およそその頃の遺跡と考えることができます。宇賀は遺構が見つかって遺跡のあることが分かりましたが、出土遺物が少なくまた様々な時代（弥生時代～中世）のものを含んでいるため、遺跡の残された時期がはっきりしません。高田も宇賀も今後の本発掘調査によって遺跡の時期や内容、性格が明らかになるものと期待されます。

新発見の残り1つは安芸市伊尾木の遺跡です。遺跡は伊尾木川に向かって東からのびる丘陵裾に位置しています。こちらも道路（県道大久保伊尾木線）建設に関わり発見されました。遺跡は丘陵裾と沖積地の境界にあって地形が入り組んでおり、全体に砂っぽい土が堆積しています。遺構と文化層が発見されたのは丘陵裾のごく限られた範囲です。出土した青磁や瓦器、土器は多くが14～15世紀の製品で、遺跡の時期もおよそその頃と考えられます。こちらも遺跡の内容や性格、周辺遺跡との関係などが今後の発掘調査によって明らかになるものと期待されます。

（高知県文化財課 宮里 修）



香南市野市町高田で発見した遺構



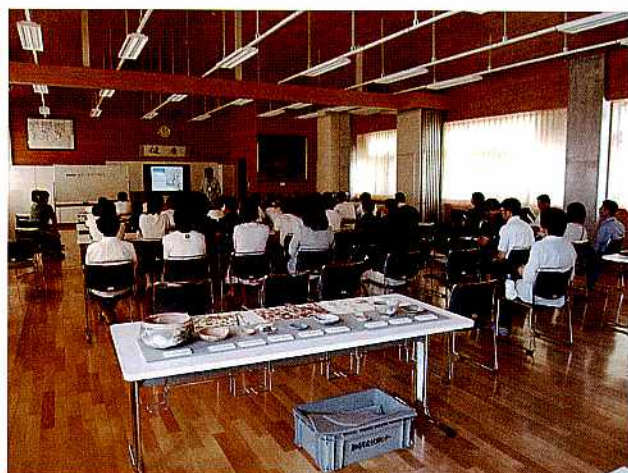
香南市野市町宇賀で発見した遺構



安芸市伊尾木で発見した遺構

## 20 出前考古学教室、親子考古学教室、普及啓発について

—地域の遺跡を知り本物の土器にふれてみよう—



出前考古学教室

出前考古学教室は今年で17年目になります。今年度は前期78回(79校)後期21回(17校)で実施しました。今年度は私立中学校で初めて土佐塾中学校からの申し込みがあり、出前教室を開催させていただきました。今後も中学校の実施回数をより増やし、小学校から中学校へと出前教室を継続することで児童生徒の興味を高めていきたいと思っております。活動内容は地域の遺跡の授業、高知県の遺物の展示解説、火起こし体験、勾玉作り、土器焼きです。地域の遺跡の授業は発掘の仕方や地域の遺

物や遺構の話など子どもたちが古代の歴史に関心をもてるような内容をパワーポイントで説明をしました。展示解説は旧石器、縄文、弥生、古墳、古代、中世の各時代の土器や石鏃などの石器を解説して、そのものに触れることで昔の人々の生活を考えていきました。本物の土器に触れることは貴重な体験であり、私たちが現代の生き方を考えるための宝物に他なりません。出来るだけ多くの児童や生徒に地域の遺跡を知ってほしいと思います。火起こしではマイギリ式を中心に昔の人々の火起こし方法にチャレンジして、火起こしを体験しました。

勾玉づくりでは、勾玉の由来や出土した勾玉を紹介したあと1時間でオリジナル勾玉を作成しました。石を加工して玉にする喜びは昔の人も現代の人も同じではないかと思えます。土器づくりは粘土をこねて、輪積みをして、1ヶ月間乾燥させた後に土器焼きをしました。今年度も多くの小学校に申し込みをいただき、ありがとうございました。



親子考古学教室

親子考古学教室は南国市、宿毛市、四万十市、四万十町、須崎市、本山町、安芸市、室戸市で計40回実施しました。火起こしや勾玉づくりの体験学習が中心です。今年度は1200人を超える人々の参加で暑く燃えました。真夏の火起こしは最高でした。

その他、古代ものづくり教室では勾玉づくり、ガラス玉づくり、銅鏡づくり、土器づくりを開催しております。考古学からわかる歴史教室にもご参加ください。また高知県の弥生土器や縄文土器片、石包丁や石鏃をお貸しすることができます。詳しくは

埋蔵文化財センターのカレンダーやホームページにアクセスしてください。埋蔵文化財を身近なものにしてご利用いただければと思います。(県埋蔵文化財センター 藤野 明弘)

## 21 遺物あれこれ

遺跡から掘り出される遺物には様々なものがありますが、遺物を分類するとき最初に注目するのは「材質」の違いです。粘土を焼いて作られたものは土器、石を加工したものは石器、木を加工したものは木器となります。また、それぞれの遺物の「形」はその使い方を反映しており、「デザイン」の違いは地域性を把握するうえで重要な手がかりとなるものです。このように遺物の「形」や「デザイン」をよく見ることは「材質」について遺物を分類する基礎的な手がかりとなります。

「形」は道具としての機能性や用途に関わる形を示すものです。煮炊きの道具として使われたと考えられる甕や鍋は土器としての使用方法は同じですが、表面的な「形」には違いがみられます。このことから、遺物に表れる「形」の変化は煮炊きや貯蔵など土器の機能に対する各時代の人々に存在したイメージの違いと捉えられ、生活文化の変化とともに移り変わっていったと考えられます（写真中央奥：土師器甕、手前右：弥生土器甕、手前左：土師質土器鍋）。



煮炊き用の土器

「デザイン」は形や文様など遺物を形作る要素のことです。大量生産される現代の工業製品と違い、遺物は1点1点が手作りになります。それにもかかわらず、同じ時期のある地域において使われた遺物のデザインには共通性が認められます。このことから、使用されたデザインは一つの遺跡だけではなく、地域全体で共有されていたということになり、遺物の「デザイン」を見つけることは昔の社会と地域性を理解するうえで重要な手がかりとなります（写真奥：上ノ村遺跡出土、手前：田村遺跡群出土）。



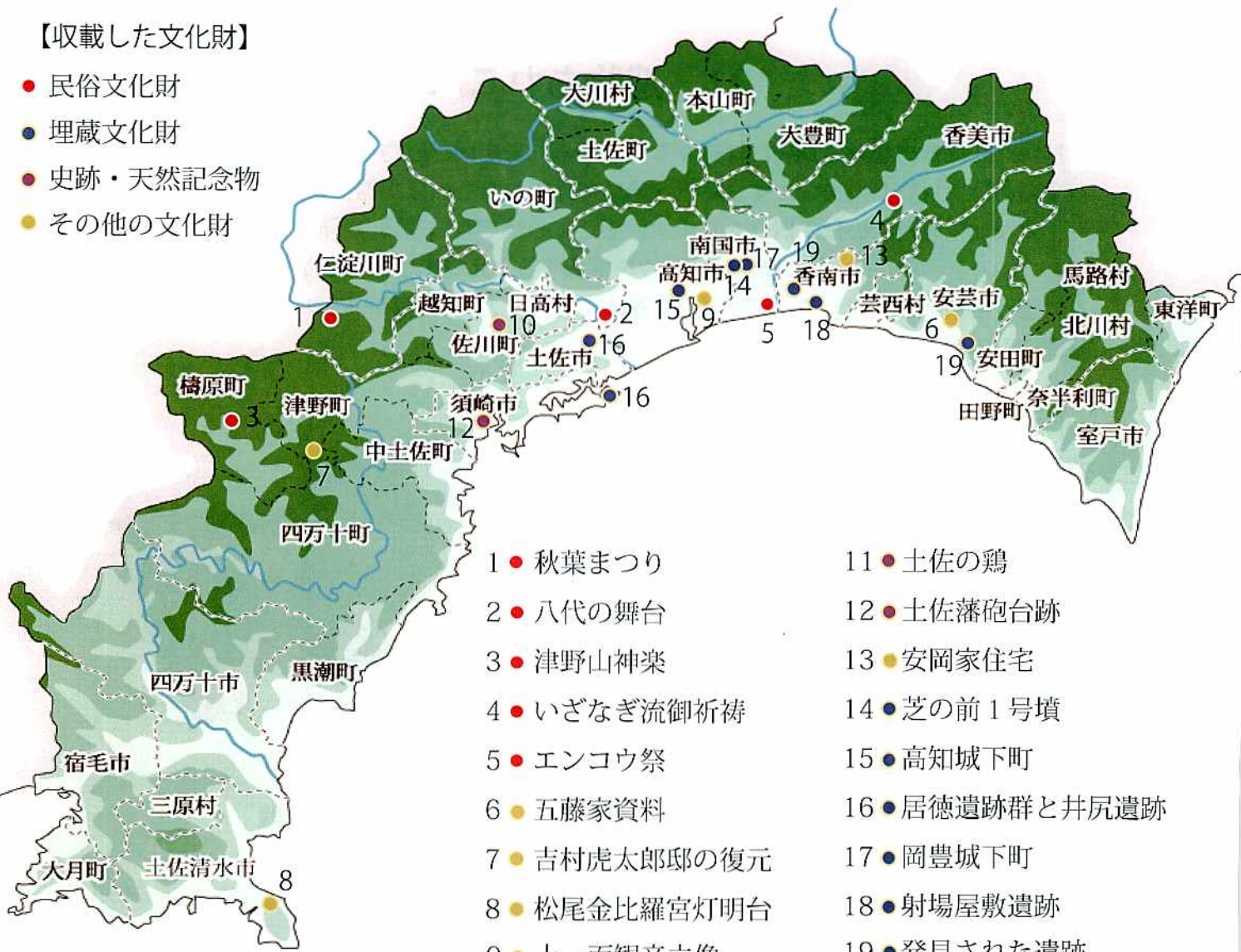
弥生土器（壺）

このように、遺跡から大量に出土する遺物の「形」や「デザイン」を見つけることは、その遺跡を理解するためのきっかけとなるものです。埋蔵文化財センターを訪れる機会がありましたら、展示されている遺物の「形」や「デザイン」に注目してみてください。これまでとは違った見方ができるのではないのでしょうか。

（県埋蔵文化財センター 下村 裕）

【収載した文化財】

- 民俗文化財
- 埋蔵文化財
- 史跡・天然記念物
- その他の文化財

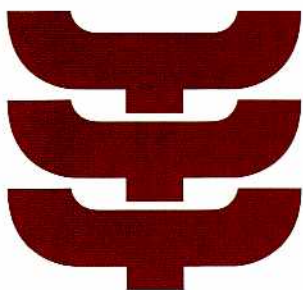


- |                |                 |
|----------------|-----------------|
| 1 ● 秋葉まつり      | 11 ● 土佐の鶏       |
| 2 ● 八代の舞台      | 12 ● 土佐藩砲台跡     |
| 3 ● 津野山神楽      | 13 ● 安岡家住宅      |
| 4 ● いざなぎ流御祈禱   | 14 ● 芝の前1号墳     |
| 5 ● エンコウ祭      | 15 ● 高知城下町      |
| 6 ● 五藤家資料      | 16 ● 居徳遺跡群と井尻遺跡 |
| 7 ● 吉村虎太郎邸の復元  | 17 ● 岡豊城下町      |
| 8 ● 松尾金比羅宮灯明台  | 18 ● 射場屋敷遺跡     |
| 9 ● 十一面観音立像    | 19 ● 発見された遺跡    |
| 10 ● 佐川城跡と松尾城跡 | 20 ● 普及啓発について   |
|                | 21 ● 遺物あれこれ     |

埋蔵文化財の主な年代



ご好評をいただいております「埋文こうち」は昨年度第27号をもって終了し、今年度より新たに「文化財こうち」としてスタートしますので、よろしくお願いいたします。



みんなで守ろう文化財

文化財こうち 第1号

平成27年3月31日

編集・発行 高知県教育委員会文化財課

〒780-0850 高知県高知市丸ノ内1-7-52

印刷 共和印刷株式会社